
何部へようこそ！

蓮希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何部へよつこせ！

【Zコード】

Z3619E

【作者名】

蓮希

【あらすじ】

何部…その部は女子四人男子一人でできている部活であるさて、其処に所属する唯一の男、一年の椿は部長桜のストッパーである。其処の副部長、百合と共に暴走する部長を止めたりと仕事は少ないようが多い？椿と部員四人が起こすコメディー？

何部の存在

データ

杉皮高校 『何でもどんなことでもやります的な部』 通称『何部』
また影では『花の部』とも呼ばれているらしい

部員 五名 女子 四名 男子 一名（俺）

顧問 なし

花の部由来

部員名簿

水仙	秋川	鈴川	赤崎	齋藤	藤とう
椿	柘榴	菊	百合	桜	さくら
椿	柘榴	一年	二年四組	一年一組	女子
同じく	一年五組	一年	二年二組	二年	女子
		五年五組	五年五組	五年五組	男子

桜・百合・菊・柘榴・椿と全て花の名という結果から考えられたと思える。

「つまらないわ」

机に肘をついて窓からぼんやりと外を見つめるのは『何でもどんなことでもやります的』な部『通称『何部』』の部長、桜さん。

それにはあつと溜息を吐いて桜さんを見つめるのは百合さん。そして形の整った唇から何時もと同じような言葉が俺達の耳に聞こえてきた。

「お前がこんなくだらない部を考えるからだろーがー。桜。一年まで巻き込んで」

そういう百合さんが素晴らしい素敵な方に見えたのはきっと俺だけじゃない……筈。

この男勝りな口調の人は、この部の副部長の人。

そんな中、一年三人の中で唯一この部が好きという菊がテーブルの隅でお茶を啜つて言った。

「でも、皆さんと出会えたのは桜先輩がこの部を考えてくれたから……だと私は思うんです。」

良い子だ……と俺はしみじみと思つ。でも俺はこの部に入つて楽しい事なんて得に無かつた。別に大変だったこともなかつた。よつは……あれだ。活動することが無いのが厳しい。

「…………」

ずっと沈黙を貫き通そうとする俺のクラスメートであり、俺の幼馴染である柘榴。

無口だが、話しだすとまた話が長いという女子である。

序に此処で語つておこうと思うが、俺……水仙椿はこの五人の中で

唯一男子である。

主に俺の仕事は 茶を淹れるか茶を淹れるか桜さんの暇つぶしに付
き合ひつかとかそんな感じである。

序にこの部四人の女子は全員容姿が整つていて誰かから聞いた話だと 理想の美人（桜さん）と近寄りがたい雰囲気でそれでも素敵（百合さん、柘榴）と可愛い！何この子うちで飼いたい！（菊）との三つの項目でこの部の女子は分けられるようだ。

序に唯一男の俺はこの女子達に囲まれて居るということで視界にも入っていない…もしくは男子に睨まれるという存在だな…退部届けだしでも良いでしょうか？

「…ねえ、椿。何か楽しいことない？」

「知りません。俺より柘榴に話を振ったほうがきっと楽しいですよ。多分。多分ですがね。まあ俺は『口イツ』とこの何年間という時と一緒に過ごしてきた家族みたいなもんですから、俺的に『口イツ』といふのは楽しいと思いますよ」

そういうと桜さんはそうねと柘榴を見た。すまん、柘榴。俺は桜さんの相手で毎回毎回疲れたんだ。偶には変わつてもらつても構わないよな？…多分。

「……………ふざけるな」

柘榴が小さく俺に向かつて何かを呴いたのは多分幻聴。絶対幻聴。何が何でも幻聴なんだ。

「桜、柘榴に楽しい話を期待するのはよせ。私は柘榴と三十秒以上会話したことは一度もない」

「……………えと、私は十秒も話してません」

菊。それはお前が柘榴と『何時も椿さんだから私がお茶淹れますか

柘榴さんも飲みますか?』『知らん』的な会話しかしてないからだろうが。……後この二人が会話してるのを聞いたことは……ああ、そういうえば菊が悲しそうに話していた。『ざつ、柘榴さん!…皆さん居ませんから一緒にかか、帰りませんかー?』『帰らん』っていつ会話をしたと。

主にこの部は全員で帰るのがルールなんだが、偶にできないことがある。それは俺と桜さんと百合さんが委員会に入ってるからだ。約一ヶ月に一回委員会で集まりがある。ついでに俺と百合さんは風紀。桜さんは図書だ。その為二人はその一ヶ月に一回は部員全員で帰ることができないのだ。

まあ柘榴は数人でいるより一人でいたほうが静かで落ち着くといつタイプだからそう返したのだろ?。多分……

「……柘榴。お前少しば話せよ」

「…………無意味」

じゃねえから。会話を無意味なんていう奴俺は始めてみたぞ?と、部長なのに心なしか影が薄くなってきた感じがする桜さんに視線を移した。桜さんは俺達なんてほっぽつて本を読み始めた。最初からそうしてくれよ。

そんな事を考へているとドンドンッと扉がたたかれた。百合さんが菊の淹れたお茶を啜つて扉に視線を向けた。

「依頼人か?入ると良い」

その言葉に扉を叩いた相手は困ったような表情で入ってきた。

「野球部の試合に出てくださいーー!」

その言葉に文字通り俺と菊と百合さんは固まり、何時も無愛想な柘

榴は眼を閉じて息を吐き……桜さんは田をキラキラさせた。

「勿論やるわー！」

と俺達全員が予想していた言葉を桜さんは大声で言った。

野球をしよー！

「誰か、何でこんなことになつてゐるのか教えてくれ……」
俺の言葉に答えるものは誰一人居なかつた。

ギリギリの人数で保つていた野球部が事故により四人が足を負傷、
または腕などを負傷して使い物にならないらしい。で、明日試合が
有るらしくて棄権はしたくないということで何部に依頼に来たらし
い。

所で、この部は去年も同じような事が起きて試合を棄権したようだ。
その前も棄権したようなんだ……。といつことで今年の三年生は一回
も試合に出でていないとらしい。

呪われてないか？この部活

「スミマセン……うちの我派で」

そういう一人の野球部員。ニコリッと笑つた。

迷惑かかるかもしれないがまあ四人負傷で女四人が野球試合に出る
ので俺は見学だ。

ああ、良かつた。

「じゃつ、齋藤桜、いつきまーす！」

ブンツとバットを振り回して言つた桜さんに引きついた笑みを浮かべ
る俺達。

ああ、何もしてかさないでくれることを祈りう。……桜さん。ビー
か何もしないでください……！

俺達の祈りが祈ることはなく

桜さんは野球部の投げたボールを見事バットで当てる……

桜さんが振ったバットはボールと一緒に見事、二階の教室の窓を直撃した。

ついでに、今割った分の窓代は全て野球部の部費から出してくれるようだ。野球部の副部長がははーと乾いた笑みを浮かべながら言った。ついでに桜さんの表情には悪いのわの字もなかつた。

「いやー、すつきりするわ！」

罪無き野球部よ……うらむなら何部じゃなくて桜さんを恨んでくれ。

「……は、はは。さすが花の部部長！齋藤さん……これならきっと勝てる……！」

引きつった笑みを浮かべながら言ひ野球部の部長、真影さんは桜さんの投げたボールとバットを回収してきてガラスの破片で手を切つたのか血が出ていてなんかもの凄く申し訳ない気分になつた。

「…………あ、あの……真影さん。何なら俺が半分出しますが……（何部の部費から）」

「いやー、でもそれじゃ迷惑じゃないですか？（何部からなら喜んで……って言いたいんですけど）」

口ではそれっぽい会話をしながら眼では何部からどうやって持つてこようかなんて話しあつてたりする俺達の耳に届いたのはやる気の声。

「うしつ、なら私もやうつか！」

そう言ってやはりバットを振り回すのは副部長、百合也んだ。

ついでに、この部のみんなは運動神経が良い。前に一度桜さんの提案でカン蹴りをやつたがその時のみんなのすばやさと言つたら……とか馬鹿な事を考えているうちに野球部が百合也んごボールを投げた。

百合也さんは「ソントロールが良いから平気だらう。ほら、まっすぐ飛んでいた。

「わしのジラがあああああああつ！」

……まっすぐ飛んでいった野球ボールはだんだん速度を増して教頭のジラを吹き飛ばして行つた

「あの…百合さん？」

「失敗したな。申し訳ない…」

ああ、やっぱりこの人は素敵だ。

桜さんと違つて悪いと思っている。流石桜さんのストップバー！！俺の女神よ！－アーメン！－

「馬鹿なこと考えてないか？椿」

「ななななつ、何でもないッスよ！？百合さん！？」

「そうか。」

あ、それで納得するんだ。

所で野球部が全員涙を流しているのは何故だらうか

「勝てるつー！これなら勝てるぞー！初試合で初勝利なるかもしけん！」

「くー！花の部に頼んでよかつたぜええー…」

とか次々気持ちを口にしていく野球部。

……初試合…あれ？この野球部できたの何時なんだ？此処に入学したときに10年とか聞いたと思ったんだが。

「次は菊ね！頑張つて！－」

その言葉にうつと言葉に詰まる菊。流石に野球は下手なのだろうかとか思った俺の勘は的中した。

菊はボールが通り過ぎた後にブンッとバットを一回転させるのだ。
思わず笑う一同。菊の顔は真っ赤だ。流石に膨れている。

「…………酷い 酷い 酷い 酷い 酷い 酷い 酷い………… 酷いです椿……！」

「は？俺？」

「椿です！」

なんでだよ。

「まあ一人ぐらいこんなのが居ても楽しいな。じゃつ、次は柘榴な
つー！」

その言葉に静かに頷いた柘榴。
そつと右手でバットを握りたつた。
…… アイツなら大丈夫だろう。

そう思つた俺の勘は悲しいことに外れてしまった。

柘榴が打つた球は見事に野球部員の一人の腕に直撃した。

「椿さん…………よろしくお願ひしますね？」

そういうつた野球部員に俺は本氣で退部したいなと思い始めた。

片手にバットを持つた俺はこの部員の代わりに試合へと出る」とことなつた。

俺に出かけるか！？と思つていた試合当日 残りの野球部員が乗つて
いたバスで事故が起きたらしい。

「残念ねえ…」

そういう桜さん。俺はポツリッと呟いた

…本当に呪われていないか？この部

ドタバタ美術部！

トントントントンッと桜さんが机を指で叩く音。

俺はテーブルに座つて今日の授業のまとめをしていく。明日テストなんだよな……

見れば柘榴も向かい側で授業のまとめをしていく。明日のテストは数学……

面倒くさいな……ん?

「桜さん、近いです」

いつの間にか桜さんが田の前に居て軽べじびつたように顔を引きつらせる。

「暇よ

「俺達勉強中です。菊がもうすぐ来ると思っていますからもう少し舞つててください」

「舞えないわよ」

「魔つててください」

「悪魔の類?」

「馬つててください」

「馬?」

「マシユマロ食べてください」

「いやつ急に変わらないでよ……?」

突つ込みいれる桜さんに面白いなあとか思つて穏やかな表情をしている俺に柘榴が睨んできた。

まじめに勉強しろつて顔だ。

いや別に親とか成績とか悪くても何も言わない人だから構わないが。スラスラッとノートにまとめる伸びをした。すると桜さんがいうには掃除当番だったらしい百合さんが大きな欠伸をしながら入ってきた。

「ふわああ……眠い……ん? 椿も柘榴もテストでもあるのか?」

俺と柘榴を見てソファにかばんをほうつ投げて叫び百合さん。 「ク

「クと頷く俺と柘榴。

「さー、今日は何しようか……ただ此処に居るだけじゃ部活にならんしな。」

ブツブツ咳く百合さん。百合さんは桜さんが暴走しないように今日は何をするか考えるこの部の苦労人だ。

柘榴が思いついたように顔を上げた。鞄を『ゴソゴソ』と弄つて何かを取り出した。

「何だそれ?」

「…………オセロ」

ミー！オセロを取り出して無言で桜さんに渡した。百合さんが分かつたと頷いた。

あの一人がオセロやつてゐるだけまとめとけって事かあ…………柘榴よ。

「遅れてスママセンでし…………た?」

最後が疑問系なのは何故だ菊よ。

菊はまず桜さんと百合さんのしているオセロを見つめてから俺と柘榴が始めた将棋に視線を移した。

まとめ終わつたのは良いが一人が何時までもオセロをやつているもんだからまた柘榴が鞄から取り出した将棋で遊んでいる。

にしても柘榴。お前のその鞄には何が詰まっているんだ。

「教科書類。桜先輩の為の暇つぶし類」

その言葉にそつかとしか答えられなかつた。

「有難う柘榴。俺が悪かつたよ…………

「菊、お前もやるか?」

「私……その、将棋は分からないので見ているだけにします。」

そう言って俺の座つているソファの後ろから身を乗り出した菊。俺は歩の駒を動かした。

柘榴も歩の駒を。次は金の駒を俺が動かす。柘榴は今度は香車の駒を一つ動かした。まだ敵陣に乗り込むのは早いだろうと唸つて歩の駒を一つ動かす。それと同時に動かした場所を角行に通られて角行を取られた。

「あああああああ待つたああ……！」

「無理だ。椿は単純すぎる」

「……」
「うそうだよ。百回せㄇいやしどもつたのに一度も勝てない俺だよ
！」

そんなとき、ようやくオセロが終わった百合さんと桜さんが菊に気付いて笑いかけた。

「おっ、菊。来たのかあ……」

「あ、百合先輩……！」

ソファから身を乗り出していた菊が慌ててペロリッと礼をした。

「今日はどうするんですか？ 桜さん。」そのまま遊びますか？

どうせ今日もやることが無いのだね。そう思つた俺に告げられた言葉は予想と違つた答えたつた。

「うーん、今日は依頼が来てるのよ

え？

「マジ…っすか？ 桜さん」

「本気と書いてマジと読むわ」

「内容は何ですか……？」

俺と菊の言葉にふつふつふつふつと笑つた桜さん。何かいい気がしないのは俺だけか？

「美術部へ行くわよ

「……何故だ？桜。」

ポカーンとする俺達。美術部…なんでだ？

「私と百合と柘榴と椿はほら、元美術部じやない？中学のときオーリ5だつたし。」

桜さんの言つとおりだな。え？何で桜さんがそんな事知つてるかって？中学が一緒だつたからだよ。

「菊は帰り道で必ずポスター見るもの。」

菊のポスターは必ずつていうほど見られている。それほど絵が上手いって事だ。

「で、それを知つているあたしの一個上の美術部の先輩がね、一年二年に絵の書き方教えてくれつていうのよ」

「……分かりました。」

まあ取り合えず何も起きないだろ？と俺達はコクリッと頷いた。

「此處の線はまずこの形を…………」

俺と同い年で俺の隣のクラスの水無月 茜に教えると有難うと呟いて俺から鉛筆を手に取り書き始めた。

「教えるのが上手いな、水仙は」

「有難うございます」

先輩から言葉をもらいニッコリと笑いながら禮を言つて再び茜を見た。

お、これは上手い。どうやら俺は当たりを引いたようだ。茜のスケッチが終わりバケツを持って水淹れてくるという言葉をきいて俺は他のメンバーを見る。

桜さん＆一年生ペア

「だーからー！此処はこつ書くつて何回いえば分かるのー？？」

「あのなあーこつこつこつ……じゃわからんねえんだよーしつかりと言葉を使えーーー！」

「使つてんじやないーあーアンタつて馬鹿ねーーー！」

「ふざけんじやねえよーーこの線をどうしたら上手く見えるかとか一年が分かりやすく教えてるのがお前の目にはみえねえのかー？」

「人は人！私は私よーー！」

…………スミマセン、先輩。

百合さん＆三年生ペア。

「…有難う。百合」

「いえ、これも先輩のため……あつ此処色を……」

順調らしい。

「あああああージャージが真つ赤にーー！」

「すつスミマセンッ！先輩ーーーー椿つ交代しろーー！」

嫌です。先輩。

絵の具を零してしまった百合さんが三年生の先輩に土下座しかけている姿を視界の隅に追い払つて次を見た。

柘榴＆一年ペア

「…………」

無言で鉛筆を手に紙に書く柘榴。一年は既に遠い眼をしている。

『ああ、何で俺はこの人となんだらう』とか思つてゐるんだろうな

…………

いや、顔が心なしか赤いから少しひラシキーとかは思つていそつだ。

「……柘榴、胸見えてる」

俺の小さな呟きを聞き取つた柘榴から空っぽのバケツが投げられてきた。

菊&二年ペア

「御免なさい御免なさい御免なさい御免なさい……」

「あつ、いやその泣かないで?ほら、ジャージなんですぐに洗えば良いじやない?鈴川ちゃん。」

「スミマセンッ!!弁償させてください……いくうですかあああああああ……?」

「だから良じつてばー……!」

百合さんと同じく色つき水を零したようで平謝り状態だった。

あの、先輩。御免なさい……後で洗剤届けておくんで。

…それも迷惑か

結局、今日の依頼もドタバタしたもので終わつたようだ。

ドタバタ美術部！（後書き）

何かギヤグが足りないな……というよりたんに分かりにくい話なんか。

http://hp23.0zero.jp/bbs/kiji.php?uid=himitukiti&dir=382&num=3&th=&num=1211640598305&m_no=0

参加させていただこうと思つていい企画ですー！
少しでも気になつた方はアドレスkopipette行ってください。

中間テストだ！

「てるてる坊主を作りましょうーーー！」

突然桜さんがひらめいたように手を打つていった。

その桜さんの言葉に俺達はは？とあきれた顔をする。その反応に膨れる桜さん。いや、だつて行き成りてる坊言われても。大体もう梅雨だし多分そんなの作つても意味が無いんじやないか？今運動会の時期な学校もあるかもしけないが俺達の学校は基本的に十月。文化祭は九月。球技大会は十一月。七月は校長の趣味で作つた花火大会があるが……六月に行事はない。

「別に晴れなくても良いだろ……」

「よくないわ！！！」

「其の前に勉強をしろ」

あつ、間違えた。六月の行事は 好きな人が居たら見てみたい中間テストがあつた。

俺達全員テーブルに座り、教科書やら参考書やらを広げている。ちなみに柘榴と百合さんは勉強時は眼鏡だつたりする。

「えー？」

「成績悪くて困るのはお前だろ？」「んー、つゞばき！勉強教えて？？」

そんな可愛く首かしげるのは犯罪でしょうーーー？桜さん。

そんな事を思つていたらギロリツと柘榴から睨まれた。おい、何で

俺の思うこと分かるんだよ。

「菊つてアーメオタクだつたんだな。」

アーティストの音楽が好きだとしてもオタクはいきません
ださう。

ちつ違ひません。

違わないのか。
菊。

「うー……百命さんだつて声優オタクなくせ!」い！！」

そういう話なのか？いやいや、百金なんか声優オタケって本當のか？良いな。そのギャップは良い……あれ？俺変態になりつつな

一
二
三
四

卷之三

ボツリッと柘榴がノートに字を書く手を止めずに呟いた。おい、何

卷之三

「頑」の母 タワツ話が一歩進む「頑ニシテ」

俺の言葉を遮つたのは膨れた桜さん。ああ、てる坊の話をスルーされたからツマラナイんでスね。桜さん。

「ね？勉強教えてよー？」椿。

「百合さんに教えてもらひたまうですか？ 一つの俺にじやなく

て
二

「だつて 百合厳しいんだもん。成績良いの分かるわ~」
こんな話をしているが、桜さんは上位50名と張り出されるぐらい
頭が良いのだ。… といっても中学の頃ひょこんと結果見せてもらひつ

ただけだが。序に百合さんは毎回一位。流石だ。だが上位50名は桜さんにとって中の中らしく、せめて25位には入りたいのが今回の目標らしい。…じゃあ勉強しろよ。

序にこれを言つと面倒になるが俺は毎回一位か二位かそのどっちかだつたりする。

ちなみにそのどっかには柘榴の名前が入つている。

そういうえば菊は……と振り向くとびょーんとした雰囲気が漂つている。

「菊？」

「…………」

椿。私にも勉強教えてください。

涙眼で言つ菊。俺はこいつへりと頷いた。

「うして俺の菊と桜さん一人に中間テストが始まる前日まで教えることになつた。

一年生 上位50名発表

一位 水仙 椿
一位 秋川 柘榴

49位 鈴川 菊

二年生 上位50名発表

一位 赤崎百合

五十位 斎藤 桜

この日から何部は頭が良いという噂が立つた。
.....菊は頭が良かつたが桜さん。

貴方本当にギリギリでしたね

中間テストだ！（後書き）

誰か…… 私にギャグをください（H）

あ～めあ～めふ～るふ～る

何でもどんなことでもやります的な部だつて毎回依頼が来るはずがない。

其の前に野球部、美術部と依頼が来た時点で凄いのだ。過去新記録かっていうぐらー。（いや、ちゃんと依頼は来てたけどねー。）この部を哀れに思つた人が！）

それにこの部は依頼が来ないとやることが無いのだから滅茶苦茶暇なのだ。

「暇よ。遊びなさい椿」

「何処の女王さまですか。嫌ですよ、サーさん」

「誰ー？」

「誰つて貴方でしょ！」「スター・サタン」

「いや！！！私女だしつてかサタンつてなによー？」

「あー、間違えました。ミスブランデー」

「いや、もう何がなんだか」

「じゃあ止めれば良いじゃないですかー？」

「ああ、そうね。帰るわ……つって何でよー？」

「…………遊ばれているな。桜」

俺と桜さんのやりとりを見て五月が終わるといつこの時期に熱いお茶を啜りながら百合さんは呟いた。

……百合さん、見てるこちらが暑いんですけどどうしたらいいんでしょうか。

……よしつ、百合さんも漫才に入れてやるー！

「ミス、コリ。ああ、貴方は何故私を愛したのですか。私は貴女が思つほど良い人ではないのに」

そつと百合さんの手を取ると百合さんは驚いたように目を開いてふうっと息を吐いた。

「ノル気満々だつ！百合さん……！」

百合さんは桜さんのする本当に馬鹿なことは止めるが俺みたいなこんなお芝居みたいな馬鹿には意外とノッてくれるので。

うん、良い人を先輩に持つたな。俺。

「勿論、分かっていた。私だって……貴方が其の手を赤く染めている事を……それでも私は貴方を愛してしまったからつ……」

「百合がノッたー！！？」

思わず座っていた机から立ち上がってツツ ノミを入れる桜さん。俺はそのままそつと百合さんを抱きしめた。勿論芝居なので百合さんはもノッて俺を抱きしめ返した。

「つスマナイ、ヨリ。私はどれだけ貴女を傷つけるのだろう。そう考えると、今分かれたほうが良いと思つてしまふんだ」

「嫌だつ！貴方を離れるくらいなりつ……貴方のその赤い手を私がもうりうりー！」

「軽くサスペンス來たー！！？」

その言葉にバツと百合さんから離れた。

「くつ……この私の商売道具をやるものか……つーーー！」

「ならばっ、貴方を殺して私は死なん！」

「其処は私も死ぬでしょーーー？でか何で武器構える真似してるのであんた等ーーー！」

ぜえぜえとツツ ノミ疲れの桜さんを置いて百合さんは涙を流すふりをした。

「私が貴方と一緒に居たいだけなんだつ！」

「だがつ……（ピ――――――）をしていて人を（ピ――――――ピ

ー）をしている俺をお前は愛してくれる筈が無いだろーーー！」

「公開できないこと言わないのでつーーーでかこれだと軽くH口へ思われるわよーーー？」

「H口くないぞ？」

「知ってるわよー。」

そつとひて肩で息をする桜さんをほつまつて俺達は椅子に座る。

「いやー、百合さん凄いですねー。」

「ふつ……元演劇部をナメるな。」

いや、初めて知った事実なんですが。そつとひてまたお茶を啜る百合さん。ですから暑いですって。

「柘榴も菊も遅いのよね~…………暇。」

「なら俺と漫才しましちゃうか」

「しないわよー!ーとかあたしに馬鹿なことするなって言ひへくせに椿の馬鹿なことにはノッてるのなんで?百合」

「人に迷惑かけないからだ。」

その言葉に反論ができないのかガクシツと肩を落とす桜さん。

「……うー…………シマラナイわ」

しょんぼりと窓の外を眺める桜さん。雨がああああと降っている。梅雨が終わったら夏かあ

「ずっと思うんだけどこの部作つたこと自体駄目だったのかしら?」

「困っている人が居たらその人を助けつつ自分の楽しい事をしたかったんだけど……ね」

そんな事を言ひ桜さんに俺と百合さんは顔を見合させて息を吐きながら笑みを作る。

「なーに言つているんだ?桜。お前が作つた部なんだぞ?」

「そうですよ。桜さん……俺達を巻き込んだんですよ?きつちりやりましょ。作つて三ヶ月で廃部なんて嫌ですし。それに梅雨が終わつたら夏ですよ?やること増えるんじやないですか?」

俺と百合さんの言葉でぱつと顔を輝かせる桜さん。

くつ……その顔は反則だあ……つ！抱きしめたくなる。

いや、俺男だし……そのなんといつか……柘榴で慣れたといつてもやつぱりこいつこう顔は……

「椿」

「ヤリッと笑ひつい笑む。止めてつそんな顔で俺を見ないでくださいつ……！」

「よしひ……菊達が来たらカルタ取りをやつましましょう！」

「行き成りすぎ」

俺と百合さんのシッ！」をへへりこまたガクシッと肩を落とした桜さんが居た。

まあやつらの話も行き成りすぎだつたんだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3619e/>

何部へようこそ！

2010年12月14日21時44分発行